光葉ワーキングクラブメールマガジン

＜2014年6月号＞　　87号　2014.06.02配信

初夏の日差しが時々雲間に隠れ、間もなく梅雨がやってまいります。

5月の光葉同窓会総会はホームカミングと同日開催でした。これに先立ち行われた全国支部長会は光葉同窓会の国内全支部(49支部)の支部長様にご参加を頂くことができました。

光葉ワーキングも働く女性を応援する様々な情報を発信してまいります。

■同窓会だより

2014年度第41回光葉同窓会総会が開催されました

＜開催日＞　2014 年 5 月 18 日（日）　10：00　～　13：00

＜会　場＞　昭和女子大学グリーンホール・ 学園本部館３階大会議室

第 1 部　総会

坂東眞理子理事長・学長をはじめ、平尾光司学事顧問にご出席いただき、来賓・恩師、同窓生 222 名の参加でした。

☆横井千香子同窓会会長の挨拶

「会長就任２年目となり、3 つの活動とともに、オープン・フランク・イノベーションで学園と光葉同窓会本部、支部との対話を通して光葉同窓会をより良いものにしていこうと思います。」

☆坂東眞理子理事長・学長の挨拶

「昭和女子大学は世界と繋がり、社会と繋がり、地域とつながる、グローバルに色々な場所と繋がるという新しい時代に入りました。伝統は大事にしながら新しい時代のニーズにこたえていく大学にしたいと思います。」

☆平尾光司学事顧問の挨拶

「昭和は大きな前進をしております。創立 100 周年をめざし母校として誇りをもっていただき、女子大ナンバーワンになることを期待してもらいたいと思います。」

第 2 部　講演会

本学初等部 6 回生の平原史樹氏（横浜市立大学附属病院　病院長）から**『遺伝子が診断され、明らかになる時代のなかで』**をテーマにお話を伺うことができました。

第 3 部

来賓・恩師を囲んでの昼食会でした。皆さまが笑顔で、懐かしいお話、楽しいお話がたくさんできました。

来年度は東北地方の支部のご協力をいただき、宮城県仙台市で同窓会総会を開催いたします。

皆さまの笑顔にまたお会いできることを楽しみにしています。

＜第 2 部　講演会　要旨抜粋＞

講演者：平原史樹氏　横浜市立大学附属病院　病院長（1964 年本学附属昭和小学校（初等部　第 6 回生）卒業）

演　題：『遺伝子が診断され、明らかになる時代のなかで』

―将来自分が乳がんになる？胎児の姿が生まれる前に！はたして私たちにはよいことなのでしょうか？―

私は産婦人科の医師をしておりますが、もともと今日の話は進みすぎている医療で何もかもがわかってしまうことが果たして私たちにとっては良いことなのか、というお話です。

女優のアンジェリーナさんが、将来遺伝性の乳がんになる可能性があるということで、予防的に 30 代で乳腺をとりました。女の子が遺伝の半分の確立でその子供も遺伝子を持っているという家族性乳がんは乳がんの人の５％くらいといわれています。男性にも少ないですが、乳がんがあります。

遺伝カウンセリングは出生に関する遺伝の医学的状況を正確に伝えながら行います。子供の健康管理が大事だとしても自分で判断できない時にどうなるのでしょうか。娘さんが思春期に将来癌になる確率が高い事がわかるとどうなってしまうのでしょうか。子供の時に知ったほうがよいのかという問題、知らないでいる事の権利があります。

今の妊婦さんはお腹の中の赤ちゃんの様子を４D 画像で見ることができます。心臓の動きまで見ることができるので、心臓の異常が細かくわかる時代になりました。これまでは、お腹の中の赤ちゃんを見るのは楽しいと思っていたのが、突然異常があることがわかる時代になったのです。日本の先天異常は２０人に１人生まれます。一定頻度の割合で先天異常は起こります。正常と異常が混在するのが生物の鉄則です。出生前診断はデジタル信号ですべて読み取ることができるようになっています。できることとできないことがありますが、できることなら何でもしてよいのでしょうか。出生前診断で遺伝子診断が簡単にできるようになり、父親が誰か、など唾液でわかり、ビジネスにもなっています。社会は、国民は、生命倫理は何を求めるのでしょうか。

障害を持った子供に「生まれたときお父さんお母さんはどう思ったかを聞いて書いてきてください」というと、「生まれてきてくれてどうもありがとう」と言われたといいます。「五体不満足」の乙武さんは生まれてから母子別々で、1 か月以上たってから初めてわが子に会えた時にお母さんが「かわいいと思った」と言ったそうです。最初から拒否の姿勢でではなく、長く逢えなかった子に逢えてうれしかったと言います。サリドマイド被害者の白井紀子さんは「障害は不便ですが、不幸ではない。社会の中でこうしたことを持っているというだけで、母も恨んではいない」と言っておられました。

新しい時代の中で適切に、詳細にわかりすぎることと向き合う必要があるのではないでしょうか。

＜講演会を聞いて＞

■西村幸子（1972 年初等教育科卒業）

5 月 18 日総会の第 2 部で、平原史樹先生の講演会がありました。私は、平原先生とは初等部の同級生でもありますし、講演のテーマが興味深いものでしたのでたくさんの友人を誘い参加いたしました。

遺伝子診断が明らかになる時代の中で、私たちはどのような選択　決断をしていけば良いかという重いテーマの講演でしたが、わかりやすく、丁寧にお話くださいました。我が家でも出生前診断については、娘たちとも何回か話し合ったことがあります。女性にとってあまりにつらい選択の連続に自分たちは耐えられるのか結論のでないままになっています。

先生の講演の中でも、気軽に受けられる検査だからこそ、結果を知るとあまりに重く落差があること、カウンセリングや保険制度が追い付いていない日本の医療の現実を教えていただき、わかりすぎる時代に怖さを感じました。今回の講演を良いチャンスとして、できることはしてよいことなのか、覚悟と責任を持って判断していきたいと思いました。すばらしい講演をしてくださいました平原先生と講演会を主催してくださった同窓会の皆様に心から感謝いたします。

■木村葉子（1990 年　日本文学科卒業）

医学や科学の進歩は、人類の福音となり得たか。答えの出ない、厳しい課題を突きつけられた。不老長寿は古今東西、私たちの変わらぬ願いであった。かなえるべく、科学技術は日進月歩を遂げた。世界保健機関（WHO）が 5 月 15 日発表した 2014 年版の世界保健統計では、日本人の平均寿命は男性 80,0 歳、女性 87,0 歳で、女性

は 194 か国中トップだ。最も短い西アフリカのシエラレオネ（男性 45 歳、女性 46 歳）と比べると、40 年近く長い。願いはかなったかのようにもみえる。だが、どんなに技術が進歩しても、先天的な異常を持って生まれる子は 20 人に 1 人いるそうだ。出生前診断でもわからない。異常を持つ子は必ず生まれる。正常な者だけで生きられるなどと考えることは、あまりに尊大だ。

安易に受けた出生前診断によって、突きつけられる「命の選択」。安心して生み育てられる社会が機能していれば、少しは深く悩む父母の助けになるだろうか。出産適齢期の男女だけでなく、中高生や中高年など、幅広い年代にぜひ聞いてもらいたいご講演だった。

■ひろげよう光の葉

高田 かおり さん

1981年　家政学部生活科学科卒業

昭和女子大学で培われたリーダーシップとコミュニケーション能力

昭和女子大学の特徴のひとつに、クラス制度があります。毎週クラスルームがあり、行事などの際にも、クラス単位で動くことが多いことから、自然と担任の先生やクラスメイトとの交流も深まります。クラスでは、毎年、クラスを代表するクラス委員を選出しますが、私は大学の４年間、このクラス委員を務め、大学４年時には、クラス委員会議長に選出され、大学と協力しながら、自治活動をおこなっていました。クラス委員は、クラスの意志をまとめ、自治活動に反映・実現させることが役割であるため、４年間の委員会活動の結果、自然とリーダーシップが身につき、大学や先生方とのコミュニケーションのとり方についても学ぶことができました。特に、大学４年時に、人見記念講堂が完成し、あのステージで、先生や大学・短期大学部の全学生を前に、クラス委員会議長として、挨拶を述べたことは、得がたい経験となっております。

1981 年に、株式会社ダイエーに就職し、結婚・出産・子育てをしながら、環境・社会貢献課長、広報課長、お客様サービス部長、消費者行政担当部長、ＩＳＯ推進プロジェクトリーダーとキャリアを重ねることができましたのも、大学時代に培ったリーダーシップとコミュニケーション能力のお陰であると感謝しております。特に、ＩＳＯ推進プロジェクトは、全社的なプロジェクトであり、その責任者として、約６万人の従業員を１つの目標に向かってまとめあげるという大仕事でしたが、それが達成できた時は、企業人として、ひと回り成長できたような気がしました。

2010 年より、株式会社消費経済研究所に出向し、現在、チーフディレクターとして、全国の障がい者施設を対象に、“コンプライアンスセミナー”を開催し、施設商品の品質の向上を図っております。今後も、努力を怠らず、リーダーシップとコミュニケーション能力を磨きながら、社会に貢献していきたいと思います。

End